

益田市内石造物調査概報 5

—高津柿本神社周辺および
久城踏切(JR 山陰本線)周辺の石造物—



令和6(2024)年3月
益田市教育委員会

例 言

1. 本書は、市内の石造物調査事業の一環として実施した、益田市高津町の高津柿本神社とその周辺および久城町の久城踏切（JR 山陰本線。以下略）周辺の石造物調査の報告書である。
2. 本書に係る調査の経過は以下のとおりである。
令和2年度 高津柿本神社とその周辺および久城踏切周辺の石造物の石材鑑定、撮影
令和4・5年度 高津柿本神社とその周辺および久城踏切周辺の石造物の調査、拓本、実測
3. 調査は次の体制で実施した。
事務局 山本浩之（文化財課課長。令和5年6月まで）、石田公（文化財課課長。令和5年7月から）、長澤和幸（同課長補佐）、松本美樹（令和5年12月まで同主査、令和6年1月から主幹）、中司健一（同歴史文化研究センター主任）
調査指導者 西尾克己（元島根県古代文化センター長）
中村唯史（島根県立三瓶自然館サヒメル企画情報課調整監）
調査員 中司健一、佐伯昌俊（文化財課主任主事）、木原光（同会計年度任用職員）
4. 実測図・写真は益田市教育委員会文化財課で保管している。
5. 調査を許可いただいた高津柿本神社、ご指導いただいた西尾克己氏、中村唯史氏、ご協力いただいた地元の皆様にお礼申し上げます。
6. 石材鑑定については、中村氏からご教示いただいた。
7. 石造物の実測は西尾氏の指導により佐伯・木原が、石造物の拓本、本書の執筆・編集は中司が行った。
8. 表紙の写真は高津町の高津柿本神社の伝高津長幸^{たかつながゆき}供養塔である。
9. 現地調査にあたっては、可能な範囲で写真撮影と実測、石材の鑑定を行った。
10. 石造物の記号番号として、高津柿本神社のものはTK、高津丸山墓地のものはTM、久城踏切周辺のものはKFとした。

第1章 調査の目的

益田市内には、大型の花崗岩製五輪塔（兵庫県神戸市の六甲山の御影石の可能性もある）、福井県西部の日引石（安山岩質凝灰岩）製の宝篋印塔や像容板碑、島根県大田市の福光石（凝灰岩）製の宝篋印塔、島根県鹿足郡津和野町の青野山系安山岩製の宝篋印塔など、作られた年代、石材、産地、形態、大きさがそれぞれ異なる、多種多様な中世石造物が多くのかさかしている。

これらは、中世の益田が、瀬戸内海を通じて兵庫への、あるいは日本海を通じて小浜への（兵庫も小浜も京都に運ばれる物資が集積される港町）、石見銀山の玄関港である温泉津への航路や高津川を利用し、物資の輸送をしていた可能性を示唆する。なぜなら、これらの石造物は供養塔（亡くなった人を弔うための石塔）としての利用を前提としつつも、交易船のバラスト（軽くなった船を安定させるための重し）の役割も担っていたと考えられるからである。

また、大きな石造物は荘園領主や武士たち中世前期の有力者の存在を、小さな石造物は中世後期に比較的裕福な民衆らも供養塔を建てるようになったことを物語る。

石造物については、その石材や形態から産地や年代を調べる取り組みが広く行われているが、「形態は日引石製の宝篋印塔によく似ているが、石材は日引石ではない」、などの事例もあることから、ただちに産地や年代を特定するのではなく、石材の鑑定と図化を進め、事例の蓄積を図る必要がある。

その点、多種多様な石造物が見られる益田市は非常に多くの事例を提供できると考えられ、継続的に調査を実施し、その成果を『益田市内石造物調査概報』として発表している。

第2章 高津の石造物

第1節 所在地の概要

高津柿本神社および高津丸山墓地にそれぞれ石造物群が存在する。高津柿本神社は延宝9年(1681)に津和野藩により現在地に移されたが、同地は中世に高津城があったと考えられている場所である。

正慶2年(1333)、高津道性を大将とする10ヶ国の軍勢が長門探題を攻め滅ぼした(『中世益田・益田氏関係史料集』77・78号。以下では『史料集』77号のように省略)。この功績もあってか、建武政権下の建武2年(1335)には、道性は石見守護または守護代に任じられていた(『史料集』87・283号)。道性の一族である高津長幸も石見守護代と見え(『史料集』88・93号)、道性の跡を継いだと思われる。高津氏は相当な実力を持っていたと考えられ、その本拠が高津城であったと考えられる。

南北朝の内乱期、高津氏は南朝方に属して活躍するが、建武3年正月に高津長幸はその城郭「高津郷小山」を攻略された(『史料集』88～90号)。翌4年に長幸の父了忍らが高津城を奪還したようだが、再び北朝方に落とされ降参した(『史料集』114～116号、「山口市歴史民俗資料館所蔵文書」)。

一方、高津城はその後も戦乱の際に名前が見える。正平10年(1355)および同16年、足利直冬方が高津城で軍事行動を行っている(『史料集』243～247・258号)。応仁・文明の乱の際は、東軍方が一時的に「高津小城」を占拠したのか、益田貞兼がこれを攻め落としている(『益田家文書』203・892号)。時代を通じて高津城は「小山」であるとか、「小城」と見える点は興味深い。

高津柿本神社は、その境内から高津川を眼下におさめることができる。延応2年(1240)の北条重時書状(「益田實氏所蔵文書」)では高津に「津湊」があったとされる。高津は日本海流通と高津川流通の結節点であり、高津柿本神社(中世の高津城)は高津川流通を押さえることのできる位置にある。

また、高津柿本神社の麓あたりは、大元神社の湧水により蟠竜湖疎水開通以前から開発が可能であったと考えられている。さらに、高津柿本神社の北側を長門国へと向かう道が通じていた。おそらく中世の時点で現在の上市・中市・下市の原形となる市町が形成されていたと思われる。



【図1】高津柿本神社および高津丸山墓地とその周辺(地理院地図に加筆して作成)

第2節 高津柿本神社境内の石造物の概要

【表1】高津柿本神社境内の石造物一覧表

記号番号	形態1	形態2	石材	高さ	最大幅	備考
TK 1	五輪塔(残闕)	火輪	安山岩	16.6	27.4	伝高津長幸塔の右隣。
TK 2	五輪塔(残闕)	水輪	安山岩(やや気泡が少ないが火輪・地輪と同一と思われる)	21.2	27.4	伝高津長幸塔の右隣。
TK 3	五輪塔(残闕)	地輪	安山岩	20.6	25.6	伝高津長幸塔の右隣。
TK 4	五輪塔(残闕)	地輪	花崗岩(磁性弱い)	21.0	34.0	伝高津長幸塔の右隣。
TK 5	石塔		花崗岩(磁性弱い)	—	—	伝高津長幸塔(近世以降か)。
TK 6	五輪塔(残闕)	地輪カ	花崗岩(磁性弱い)	28.0	38.0	伝高津長幸塔に使われている。

TK 1 四面に梵字を彫る。軒端は垂直で、上辺・下辺ともに反るが、上辺の反りが大きい。上部にホゾ穴があるが、モルタルで埋められている。底面にホゾ穴はなく、ノミ痕を消す丁寧な仕上げである。

TK 2 四面に梵字を彫る。最大径は中央よりやや上にある。側面の湾曲は、上部で緩やかになる。火輪との接続面の仕上げはやや粗い。地輪との接続面にホゾがあり、その周りがわずかにくぼむ。

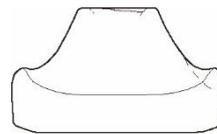
TK 3 四面に梵字を彫る。梵字は上側に寄る。水輪との接続面はノミ痕を消す丁寧な仕上げであるが、底面は幅3cmほどのノミ痕が残り、角も直線に整えられていない。

TK 1～3は大きさや石材の類似性から一そろいの五輪塔であった可能性があるが、接続面の形状や仕上げ方に着目すると、**TK 1・TK 3**と**TK 2**はやや様相が異なる。

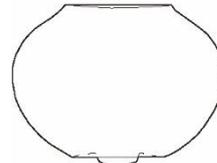
TK 4 **TK 1～3**の下に置かれている。花崗岩製。梵字は彫られておらず、底面も整えられていない。

TK 5 高津長幸の供養塔と伝わる。相輪、塔身、基礎のような部位からなる(表紙写真)。近世後半か、近代。塔身状の部位はもと五輪塔の地輪の可能性があり、次に紹介する。

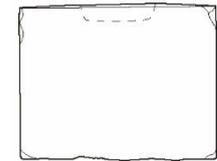
TK 6 伝高津長幸供養塔の一部に使われている。もとは五輪塔地輪か。四面に梵字を掘るが形が甘い。梵字は上側に寄る。上面に水垂勾配がある。



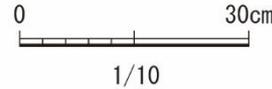
TK 1の梵字拓本
右から東、南、西、北



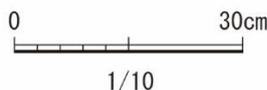
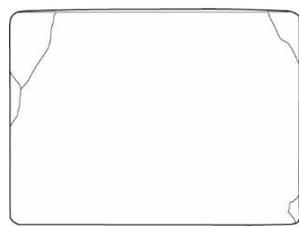
TK 2の梵字拓本
右から東、南、西、北



TK 3の梵字拓本
右から東、南、西、北



【図2】TK 1・TK 2・TK 3実測図・拓本

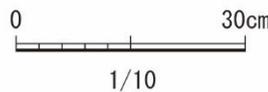
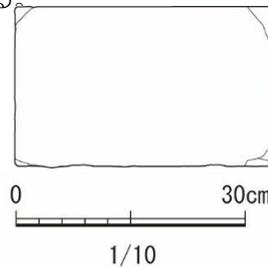


【図4】TK 6実測図・拓本



TK 6の梵字拓本 右から東、南、西、北

【図3】TK 4実測図



【図5】TK 1・2・3・4写真

第3節 高津丸山墓地の石造物の概要

【表2】高津丸山墓地の石造物一覧表

記号番号	形態1	形態2	石材	高さ	最大幅	備考
TM1	五輪塔(残闕)	火輪	玄武岩か玄武岩に近い安山岩(斜長石が目立つ)	17.0	24.4	寄せ墓にある。
TM2	五輪塔(残闕)	火輪	花崗岩	17.8	26.4	寄せ墓にある。
TM3	宝篋印塔(残闕)	基礎	玄武岩か玄武岩に近い安山岩(斜長石が目立つ)	19.0	27.4	寄せ墓にある。
TM4	板碑	地蔵が1体	日引石によく似た安山岩(日引石の可能性あり)	33.9	23.0	地蔵群にある。向かって左側。
TM5	板碑	地蔵が1体	日引石によく似た安山岩(日引石の可能性あり)	28.8	17.5	地蔵群にある。向かって右側。

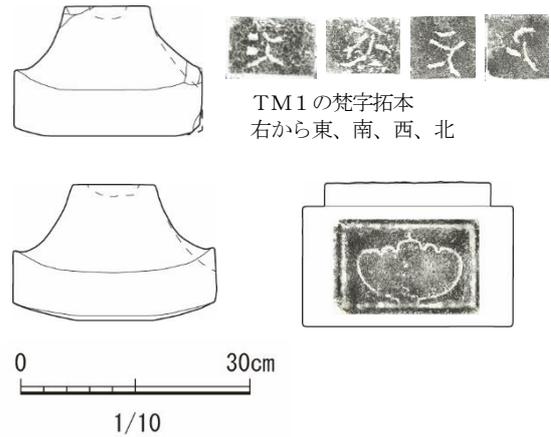
TM1 四面に梵字を彫るが、稚拙な印象を受ける。軒端は垂直で、上辺・下辺とも同じように反る。上部にホゾ穴がある。底面はノミ痕を消し、砥石で仕上げられており、光沢がある。底面にホゾ穴はない。

TM2 梵字なし。軒端は垂直で、上辺・下辺とも同じように反る。上部にホゾ穴がある。底面はノミ痕を消している。底面にホゾ穴はない。

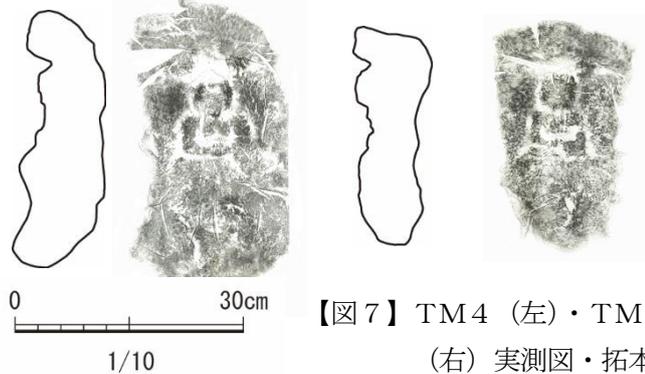
TM3 四面とも格狭間に蓮弁を彫る。上部は返花ではなく、1段の階段となっている。上面は四周を2cm幅で平らに仕上げるが、内側は平らではない。底面も四周を4cm幅で平らに仕上げるが、内側は粗いノミ痕をそのまま残す。

TM4 地蔵は1体。上部の屋根状の部分に凹線がある。表側の地上部分は丁寧な仕上げで文様もあるが、地下に埋める部分は大きな加工痕をそのまま残す。背面も粗い大きな加工痕を残す。TM5より古いと思われる。

TM5 地蔵は1体。上部のでっぱり部分に凹線がない。表面の地面に埋める部分には小さなノミによる大きな加工痕が残り、背面には大きなノミによる粗い大きな加工痕が残る。TM4より全体に雑な感がある。



【図6】TM1(左上)・TM2(左下)・TM3(右下) 実測図・拓本



【図7】TM4(左)・TM5(右) 実測図・拓本



【図8】左から右にTM1、TM2、TM3、TM4、TM5写真

第3章 久城町久城踏切付近の石造物

第1節 所在地の概要

益田市久城町の久城踏切付近の個人墓地に石造物群が、地蔵堂に像容板碑がある。

久城地域は、この石造物群の所在地あたりを南北に走る山陰本線を境に、東側が台地状に、西側が低地になっている。

台地状には、旧石器時代の石器が発掘された久城西Ⅱ遺跡や堂ノ上遺跡、縄文時代の狩猟用の落とし穴が検出された若葉台遺跡、弥生時代中期の墳丘墓が発見された専光寺脇遺跡や弥生時代中期から古墳時代前期まで集落が営まれていた堂ノ上遺跡などがあり、古くから人々が住み着いていた。

そして、4世紀後半に営まれた全長約96mの前方後円墳であるスクモ塚古墳（国史跡）をはじめとした古墳が、久城地域やその近隣に多数築かれている。弥生時代以来の開発が進展して人口が増え、大規模な古墳を築造できる基盤があったことがわかる。

延長5年（927）編纂の「延喜式神名帳」に見える櫛代賀姫命神社は、現在の櫛代賀姫神社と考えられ、近年、11～12世紀頃に作成されたと推測される4軀の神像（男神坐像2軀、女神坐像、僧形神坐像）の存在が明らかとなり注目される。中世の領主益田氏も重視した神社であった。

このように古くから久城地域が栄えたのは、東側が台地状という安定した地域であったことがまず挙げられるが、西側の低地もまた生業の面で重要であった。低地にも縄文時代後期末から晩期初頭頃の丸木舟が出土した沖手遺跡があり、古くから人々の居住が確認される。

中世以前の高津川は現在の流路に加え、益田平野を横切り益田川と合流する流れも地形図から看取される。さらに、高津川と合流した益田川は、久城から延びる砂州によって海への出口を塞がれ（現在の益田川河口はこの砂州を突っ切っている）、現在の高津川河口あたりに合流する形で西流していた。すなわち、益田平野には高津川と益田川が輻輳する内水面（現在のかもしま東町・かもしま西町のあたり）があった。この内水面が天然の良港となり、日本海を往来する船が多く立ち寄り、河岸に港町が成立した。これらの港町の遺跡が、沖手遺跡、中須東原・西原遺跡、中世今市遺跡である。港町では交易が盛んに行われたと考えられ、それを証する陶磁器や石造物が出土し、あるいは所在する。

久城踏切付近の石造物群もこうした日本海を通じた交易を物語るものと考えられる。



【図9】久城踏切とその周辺の遺跡と社寺

第2節 石造物の概要

【表3】久城踏切付近の石造物一覧表

記号番号	形態1	形態2	石材	高さ	最大幅	備考
KF 1	五輪塔(残闕)	空風輪	花崗岩	19.5	13.8	
KF 2	五輪塔(残闕)	火輪	花崗岩	17.8	27.0	
KF 3	五輪塔(残闕)	地輪	花崗岩	15.5	23.0	
KF 4	五輪塔(残闕)	風輪	青野山(灰)	8.9	13.6	
KF 5	五輪塔(残闕)	火輪	黒っぽい安山岩	14.4	23.6	1面のみ梵字がある。
KF 6	宝篋印塔(残闕)	笠	黒っぽい安山岩	20.4	29.2	
KF 7	宝篋印塔(残闕)	塔身	黒っぽい安山岩	20.4	18.0	
KF 8	宝篋印塔(残闕)	基礎	黒っぽい安山岩	26.0	28.0	
KF 9	宝篋印塔(残闕)	基礎	砂岩	15.4	24.0	
KF 10	板碑	地蔵が1体	黒っぽい安山岩	35.5	18.0	

KF 1 空輪・風輪とも梵字が彫られている可能性があるが、不明瞭である。空輪と風輪のバランスが良い。風輪の上部に水垂勾配がある。火輪との接続面にホゾがあり、その周りをわずかに窪ませる。

KF 2 梵字なし。軒端は垂直で、上辺・下辺とも同じように反る。上部にホゾ穴がある。底面にホゾ穴はない。

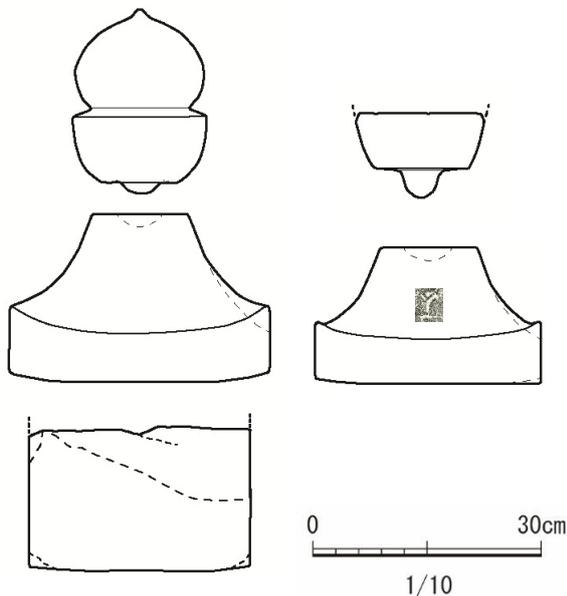
KF 3 梵字なし。上部が破損している。底面は粗い仕上げで、加工痕がある。

KF 1～3は大きさや石材の類似性から一そろいの五輪塔であった可能性がある。

KF 4 空輪との接続面で割れており、風輪のみ残る。梵字なし。

KF 5 一面のみ梵字がある。軒端は垂直で、上辺・下辺とも同じように反る。上部にホゾ穴があるが、底面にホゾ穴はない。全体的にシャープなつくりである。

KF 9 風化が激しい。四面に輪郭を彫るが格狭間はない。上部は反花を彫るが、簡素である。



【図10】KF 1～3 (左)・KF 4 (右上)・
KF 5 (右下) 実測図・梵字拓本



【図11】KF 1～3 (左)・KF 4 (右上)・
KF 5 (右下)



【図12】KF 9
左から実測図、拓本、写真。

K F 6 隅飾りはやや外に傾き、二弧式で輪郭を巻く。2つは破損。段丘は上5段、下2段。相輪および塔身との接続部分にホゾ穴を彫る。

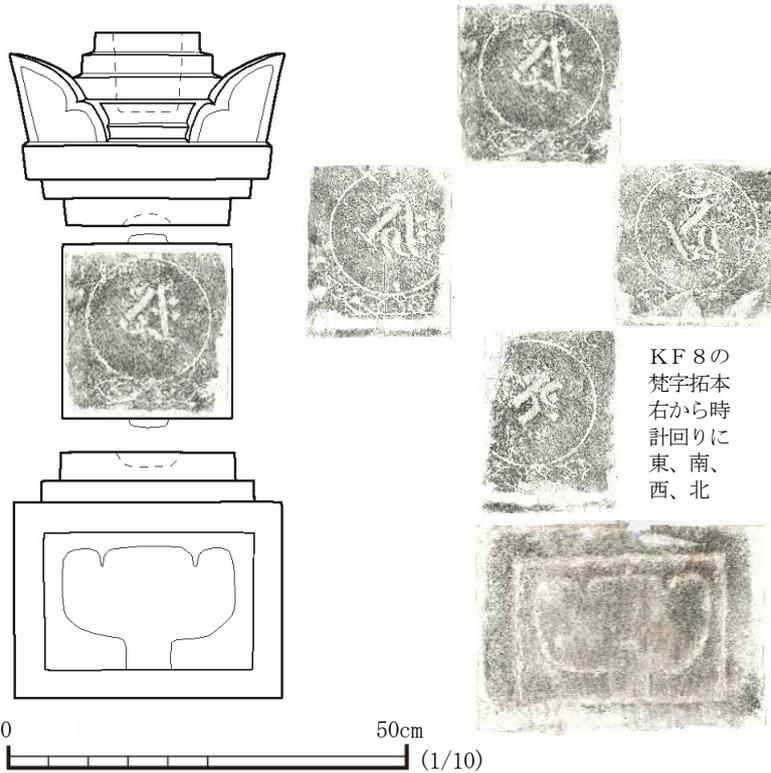
K F 7 四面に月輪と蓮座のある梵字を彫る。笠および基礎との接続部分にホゾがある。

K F 8 四面に輪郭と格狭間を掘る。反花はなく、段丘2段。塔身との接続部分にホゾ穴を彫る。

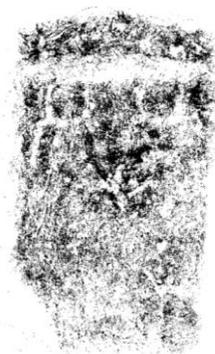
K F 6～8は形態や石材の類似性から日引石製の宝篋印塔の可能性と考えられるが、基礎および塔身と比べて笠がやや小さいため、笠のみ別の宝篋印塔の可能性もある。表面を細かくハツリ仕上げ。



【図13】KF 6～8



【図14】KF 6～8実測図（左）、KF 7の梵字拓本（右上）
KF 8の格狭間の拓本（右下）



【図15】KF 10 拓本



【図16】KF 10

K F 10 地蔵は2体。上部のでっぱり部分に凹線がない。地蔵堂の底面とはモルタルで固定されている。石材から日引石製の可能性がある。

【主要参考文献】田中大喜ほか「益田實氏所蔵新出中世文書の紹介」(『国立歴史民俗博物館研究報告』212集、2018年)。田中大喜「石見高津氏の出自と系譜」(『日本歴史』873号、2021年。『高津城跡～万葉公園防災安全交付金(公園)休憩施設建替工事に伴う発掘調査報告書』益田市教育委員会、2023年。濱田恒志・中司健一「益田市・櫛代賀姫神社の神像について」(『古代文化研究』31号、島根県古代文化センター、2023年)。

益田市内石造物調査概報 5
—高津柿本神社周辺および
久城踏切(JR 山陰本線)周辺の石造物—
発行・印刷 令和6年3月31日
編集・発行 益田市教育委員会
印刷 株式会社タイピック